

## 特集 がん医療において、精神科医に期待されるもの

## がん医療において、精神科医に期待されるもの

大西 秀樹

本シンポジウムはがん対策基本法が制定され、がん医療の中で精神科医の占めるウエイトが大きくなり、身体科医からの要望もますます増大する中で、私たち精神科医は何を求められているのか再考するために企画された。

シンポジストは小川朝生先生（国立がん研究センター東病院）、明智龍男先生（名古屋市立大学）、岡村仁先生（広島大学）、堀川直史先生（埼玉医科大学総合医療センター）ら、がん医療の現場の第一線で活躍されている先生方をお願いし、座長は内富庸介先生（岡山大学）、大西（埼玉医科大学国際医療センター）で行われた。

小川朝生先生は「精神科医への期待 いま進められている事業から」という題名で、2007年のがん対策基本法の施行、「がん対策推進計画」の策定を通し、がん医療における精神科医の位置づけ、および、その中で働くために必要な知識と教育の重要性について概説した。また、患者さんの意向を汲み取ること、緩和ケアの提供体制を整えること、包括的アセスメントの重要性を強調した。

堀川直史先生は「コンサルテーション・リエゾン精神科医が行うがん患者の心のケア」との題名でリエゾン精神科医からみた、がんに特徴的な問題点として、1) 死のイメージ、2) 治療に対するネガティブな先入観、3) 不確実性、4) 情報不足、5) 有効なセルフケアが少ないことの5点を挙げた。また、セルフケアの問題を取り上げ、医療者が情報を提供し、相談に乗り、患者が具体的な行

動を決定することを支援するエンパワーメントアプローチをがん患者に適用することは、患者の自己決定を助け、自己評価を高めるために役立つと指摘した。

岡村仁先生は「がん医療に携わる心のケア従事者への教育」との題名で、岡村氏が従事しているコメディカル教育現場では心のケアに対する教育の必要性が高いにもかかわらず、教育プログラムが不足していることを問題点としてあげ、それを解消するために日本サイコオンコロジー学会が行っている取組について言及した。

明智龍男先生は「緩和ケアにおける精神的ケアのエッセンス」との題名でがん患者に頻度の高い精神症状である抑うつ、否認、予期性嘔吐症について紹介した。また、精神療法的なアプローチの重要性と代表的な治療技法である危機介入、問題解決療法、dignity therapy、短期回想法について紹介した。

各シンポジストは我が国のがん医療における精神症状治療の問題点とその対策を適切にとらえており、今後の進むべき方針が明解になる発表であった。フロアからも、各シンポジストへの質問、勤務する病院での問題点などがあがって充実した質疑応答が展開された。

本シンポジウムは新しいがん医療の動きの中で日々臨床を重ねている精神科医の指針になったと思う。まさにタイムリーな時期に本企画を考案した山協成人大会長に改めて敬意を表したい。